The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	18世紀後半～19世紀初頭の大西洋におけるビルバオ商人の商業ネットワークと展開
Author(s)	高垣, 里衣
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/81962
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　高垣　里衣　）	
論文題名	18世紀後半～19世紀初頭の大西洋におけるビルバオ商人の商業ネットワークと展開

論文内容の要旨

本論文は、18世紀後半から19世紀初頭、つまり近世末期／近世近代転換期の大西洋世界における、ローカルな地域の港や、そこで活動した商人による、海洋を越えた商業活動を明らかにするものである。考察対象として、スペイン北部のバスク地方にあり、スペイン北部あるいはバスク最大の港として、ながらく経済的繁栄を享受してきた港湾都市ビルバオに着目する。言語や文化が異なりながらも、複合的なスペイン王国の一角を占めてきたバスク地方は、18世紀のあいだ、スペイン王室（カスティーリャ）による中央集権化を免れた地域とされてきた。しかし、実際には、王室とバスク地方の関係は良好とは言えず、また、バスクを構成してきた3領域間（ビスカヤ、アラバ、ギプスコア）の関係も良好ではなかった。こうしたなかで、スペイン王室による税関の中央集権化が推進された。これに対し、ビルバオの人々は暴動を起こして対抗することで、税関の中央集権化を撤回させた。これにより、ビルバオは近世を通して自由貿易港の様相を示したものの、スペインの帝国内貿易からは排除され続けた。本論文は、そうした状況のなかで、ビルバオ港がなぜ経済的繁栄を謳歌し続けることができたのかを検討する。近世末期という、重商主義政策が重きを占めていた時代において、ローカルな港や、そこで活動する商人たちの貿易を明らかにすることで、帝国外の貿易や帝国間の間隙を縫って行われてきた貿易を提示することができる。

「序章」では、大西洋史、スペイン史、バスク史の3つの次元で蓄積されてきた研究史をそれぞれ概観し、その問題の所在を明らかにする。また、本論文の位置づけを明らかにするために、地域史、海域史、国際商業史の3つの視座を提唱し、それらの研究史の概観と、本論文との関連性について論じる。

「第1章　近世末期の大西洋世界、スペイン、ビルバオ」では、前史として、18世紀前半から七年戦争（1756-1763年）が始まるまでのスペインと国際関係、バスクとビルバオの概要について整理する。

「第2章　七年戦争期における商業ネットワークの展開（1756-1765年）」では、七年戦争とその戦後処理の時期（1756-1765年）において、ビルバオ商人によって行われた貿易について検討する。とりわけ、ビルバオの大商人であったガルドキ家（ガルドキ父子商会／ガルドキ・エ・イーホス）に着目し、彼らがどのような貿易を行ったのかを明らかにする。用いる史料は、ビスカヤ歴史文書館に所蔵されている、ビルバオのコンスラードが記録した港湾での徴税史料である。ガルドキ家は、当時スペインとは敵対関係にあったイギリスの植民地である、ニューイングランド（あるいはマサチューセッツ）北部に位置するエセックス郡北部海岸の港湾都市セイラム、マーブルヘッドとの貿易を最も頻繁に行った。この貿易で取引されたのは、ニューイングランドで漁獲されたタラであった。当時のスペインにおいて、最もタラを輸入していたのはビルバオ港であったとされてきた。ビルバオにおいて、最も輸入を行った商人は、ガルドキ家であった。スペインにおいて、習慣上、タラは必須な食料であったことから、タラ貿易は確実に利益を得ることのできるものであった。また、マサチューセッツ歴史協会が所蔵している船舶簿史料を用いて、セイラムやマーブルヘッドが、イギリス本国との貿易をほとんど行っていなかったことを明らかにする。つまり、セイラムやマーブルヘッドといったエセックス郡の商人にとっても、自地域の生産品によって利益を得ることができないイギリス本国との貿易よりも、自地域の産品を売りさばくことのできるスペイン市場、そのゲートウェイとしてのビルバオとの貿易に価値を見出していたことを指摘する。

「第3章　七年戦争後からアメリカ独立革命期における貿易（1766-1783年）」では、七年戦争後からアメリカ独立戦争期（1766-1783年）における、ビルバオとエセックス郡諸港の貿易を検討する。従来、北アメリカの独立戦争に際して、フランス、スペイン、プロイセン、オランダがアメリカを支援していたことや、スペインが秘密裏にアメリカへと物資の支援をしていたことが知られてきた。つまり、国家間の政治関係史的視点から研究が行われてきた。これに対し、本論文は、ビルバオにおける港湾徴税史料と、アメリカ合衆国国立公文書記録管理局が整理したオンラインアーカイヴであるFounders Onlineの書簡史料を用いて、アメリカ独立戦争に際し、ビルバオとエセックスの貿易が、途絶したのか継続していたのかを検討する。国家間の外交や政治ではなく、経済史の視点から大西洋両岸の地域間関係史を明らかにすることを目的とする。くわえて、ビルバオとエセックスの関係が、経済的に維持されていただけでなく、

それを発展させて、軍事・外交情報を交換するネットワークとして機能していたことを明らかにする。

「第4章　独立革命後における貿易の連続性と変化（1784-1808年）」では、アメリカ合衆国建国後から半島戦争（ナポレオン戦争）がはじまるまで（1784-1808年）を対象に、それまで続いてきたビルバオとエセックス郡諸港の関係が、どのように変化したのかを明らかにする。ビルバオ側の史料としては、港湾徴税史料を使用する。アメリカ側の史料は、アメリカ合衆国国立公文書記録管理局ボストン支館が所蔵しているマーブルヘッド・リン税関の史料と、ピーボディ・エセックス博物館付属フィリップス図書館が所蔵しているセイラム・ビバリー税関の史料である。この時代には、すでにビルバオの対エセックス貿易における取引商品はタラだけではなく、砂糖、胡椒、ラム、タバコ、小麦、米が取引されており、商品が多様化していたことを明らかにする。その一方で、エセックス郡諸港からビルバオへと送られる商品の中には、マサチューセッツでは獲得することのできない商品があることを指摘し、アメリカ側の史料から、それらの商品がどこから来たのかを検討する。マサチューセッツで獲得できない商品は、フランス、スペイン、オランダ、スウェーデン、デンマークが支配していたカリブ海植民地、ラテンアメリカだけでなく、インド、スマトラのようなアジアからも輸入され、ビルバオや他のヨーロッパの港へと再輸出されていた。つまり、帝国内貿易から公的には排除され続けたビルバオは、かねてより続いていた合衆国とのネットワークを用いて、ラテンアメリカやアジアの産品を獲得していた。

このことから、「結論」では、ビルバオとエセックス郡諸港の貿易ネットワークが、時代を経るにつれて大西洋だけではなくアジア海域へも接続されていったことを強調する。ビルバオとエセックス郡諸港の貿易関係は、帝国貿易とは異なる様相を示していたことを指摘し、こうした帝国とは異なる地域間の経済関係が、ビルバオにとっての経済的繁栄の一因であったとして、本論文を締めくくる。以上のように、ビルバオは北アメリカとの関係によって繁栄したが、この事例を、バスクを構成する他の地域や港湾都市へと単純に当てはめることは難しいだろう。このため、関係性と比較の視点を持ちつつ、より俯瞰的に、他の都市や海域も含めた総合的研究を行う必要性がある。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　高垣　里衣　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	秋田　茂
	副 査	大阪大学　教授	藤川　隆男
	副 査	大阪大学　教授	中谷　惣
	副 査	東京大学　名誉教授	深沢　克己

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　１８世紀後半～１９世紀初頭の大西洋におけるビルバオ商人の商業ネットワークと展開

学位申請者　　高垣　里衣

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　秋田　　茂

副査　大阪大学教授　　藤川　隆男

副査　大阪大学准教授　中谷　　惣

副査　東京大学名誉教授　深沢　克己

【論文内容の要旨】

本論文は、18 世紀後半から 19 世紀初頭、つまり近世末期／近世近代転換期の大西洋世界における、ローカルな港や、そこで活動した商人による、海洋を越えた商業活動を明らかにするものである。考察対象として、スペイン・バスク地方の港湾都市ビルバオに着目し、スペインの帝国内貿易からは排除され続けたビルバオが、なぜ経済的繁栄を謳歌し続けることができたのかを検討する。

「序章」では、大西洋史、スペイン史、バスク史の 3 つの次元で蓄積されてきた研究史をそれぞれ概観して問題の所在を明らかにするとともに、地方史、海域史、国際商業史の 3 つの研究領域との接点を明示する。

「第 1 章 近世末期の大西洋世界、スペイン、ビルバオ」では、前史として、18 世紀前半から七年戦争（1756-1763 年）が始まるまでのスペインと国際関係、バスクとビルバオの概要について整理している。

「第 2 章 七年戦争期における商業ネットワークの展開（1756−1765 年）」では、七年戦争とその戦後処理の時期（1756−1765 年）において、ビルバオ商人によって行われた貿易について検討する。とりわけ、ビルバオの大商人であったガルドキ家（ガルドキ父子商会／ガルドキ・エ・イーホス）に着目し、彼らがどのような貿易を行ったのかを明らかにする。ガルドキ家は、当時スペインとは敵対関係にあったイギリスの植民地である、ニューイングランドの港湾都市セイラム、マーブルヘッド[以下、北米諸港と略す]とのタラ貿易を最も頻繁に行っていた。スペインにおいて、生活習慣上、タラは必須な食料であったことから、タラ貿易は確実に利益を得ることのできるものであり、北米の商人も、イギリス本国との貿易よりも、自地域の産品を売りさばくことのできるスペイン市場、そのゲートウェイとしてのビルバオとの貿易に価値を見出していた。

「第 3 章 七年戦争後からアメリカ独立革命期における貿易（1766-1783 年）」では、七年戦争後からアメリカ独立戦争期（1766-1783 年）における、ビルバオと北米諸港との貿易関係を検討する。Founders Online の書簡史料を用いて、国家間の外交や政治ではなく、経済史の視点から大西洋両岸の地域間関係を明らかし、その関係が経済取引だけでなく、軍事・外交情報を交換するネットワークとして機能していたことを明らかにした。

「第4章 独立革命後における貿易の連続性と変化（1784-1808年）」では、アメリカ合衆国建国後から半島戦争（ナポレオン戦争）がはじまるまで（1784-1808年）を対象に、それまで続いてきた北米諸港とビルバオとの輸入

貿易の変化を明らかにする。輸入商品はタラだけではなく、砂糖、胡椒、ラム、タバコ、小麦、米など多様化し、北米現地で獲得できない商品は、フランス、スペイン、オランダ、スウェーデン、デンマークが支配していたカリブ海諸植民地、ラテンアメリカ地域だけでなく、東インド、スマトラのようなアジア諸地域からも輸入され、合衆国とのネットワークを経由してビルバオに再輸出されていた。

「結論」では、ビルバオと北米諸港との貿易ネットワークが、時代を経るにつれて大西洋だけではなくアジア海域へも接続され、スペイン帝国貿易とは異なる様相を示していたことを指摘し、こうした帝国の枠組みを超えて展開した広域の地域間の経済関係が、ビルバオにとっての経済的繁栄の一因であった点を強調する。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、以下の三点で独創性とメリットを有する優れた研究である。

第一に、本研究がカバーする環大西洋世界の北側に位置するスペイン、アメリカ、イギリスの第一次史料を、多角的に収集し分析した「マルチ・アーカイブ研究」として高く評価できる。具体的には、スペイン・ビスカヤ歴史文書館に所蔵されているビルバオの港湾徴税史料、アメリカのマサチューセッツ歴史協会の船舶簿史料、国立公文書記録管理局ボストン支館やピーボディ・エセックス博物館付属フィリップス図書館の米国税関史料、英国国立文書館の関税史料など、複数の第一次史料を照合し、18 世紀後半のビルバオ＝北米諸港間の貿易実態を解明している。また、アメリカ独立革命期の記述史料 Founders Online を活用し、計量的分析と叙述史料をつなぐ歴史研究の有効性を、説得力のある形で提示している。

第二に、マドリッドを中心とする複合君主制国家スペイン、また、カディスを窓口とするスペイン植民地帝国の帝国貿易を超えて展開した、全く別の形での民間商人の貿易・通商や人的交流のネットワークの形成、それが重層的に展開する中で生まれた独自のダイナミズムを、ビルバオ商人を事例として実証している。貿易の限定的な自由化がなされた近世から近代への移行期としての 18 世紀後半の時代像と、その転換の主たる担い手であった貿易商たちの、国家が追求した重商主義政策とは異なる「トランスナショナル」な独自性を明らかにすることに成功している。近年優れた研究成果が続々と生み出されているヨーロッパ国際商業史研究に、政治・社会史的側面からも新たな光を当てている。

第三に、ビルバオというミクロな港湾都市の地方史(local history)研究を、広域の北大西洋・北西ヨーロッパ地域史（regional history）と結びつけることを通じて、一国史的な歴史分析(national history)を相対化するとともに、D.アーミテイジが提唱する「環大西洋史」(Circum-Atlantic History)の研究を実践している。本論文は、グローバルヒストリー研究の一領域である海域史研究の発展に、大西洋世界から貢献できる。

以上の様な優れた諸点にもかかわらず、問題がないわけではない。本論文の中核部分は、オーソドックスな事件史による時期区分に従い３章で構成されている。しかし、戦時と平時の区分が海上での戦争では決定的であるため、三区分の合理性が必ずしも明確ではない。むしろ、短期の変動（戦争・事件）よりも、半世紀にわたる長期変動をまとめて考察する方が、貿易統計データの整理も含めて、変容をより明確にできるのはないか。また、本論文ではガルドキ家の事業内容が、史料上の制約から輸送商品の荷主の役割についてのみ分析され、輸送船舶の船主の機能をもったか否かは未解明のまま残されている。さらに、分析した史料で直接的に把握できない、経由地・中継貿易港の果たした役割の解明も、貿易の全体像を明らかにするためには必要になるであろう。

しかし、そうした残された諸課題のために、本論文の価値が大きく損なわれるものではない。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。